



TITLE:

學術用語特に天文學用語に就て

AUTHOR(S):

池田, 政晴

CITATION:

池田, 政晴. 學術用語特に天文學用語に就て. 天界 1935, 15(167): 168-171

ISSUE DATE:

1935-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166983>

RIGHT:

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★
 ☆ 學術用語 特に 天文學用語 に就て ☆
 ★ 會員 池 田 政 晴 ★
 ☆ 會 員 池 田 政 晴 ☆
 ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

次に記すのは、昨年十月の總會に於ける天文學用語に關する座談會の席上、筆者の述べた所に、二三の追加、訂正をしたものである。

近頃、各方面で學術用語の修正、統一の仕事が盛に行はれ、工學、化學、醫學等の或部分では既に成案を得て、小冊子として配布して居る程であり、我々天文學界に於ても山本氏其他の意見發表となり、次第に其機運に向つて來たのは誠に悦ばしい事と思はれる。

天文學に直接携つて居る者にとつては、用語が不適當であつても、又不統一であつてもそれが爲意味が通じないとか、間違を起すとか言ふ様な事は無いので、つい此統一と言ふ様な面倒な仕事を延び延びにして居るが、一般の理學者、教育家、新聞雜誌の編輯者等は熱心に之を希望して居るのである。用語統一は先、實際社會に關係の深い學科即上記の化學、工學等から始まるのであるが、天文學も一般社會と離るべからざるものとなつた今日、新聞雜誌、中等程度の教科書、一般的な物理學書に出で來る天文學用語は、統一洗練されたものを提供する責任が吾々にあると言つてよい。

學術用語の統一に當つて最も活動すべきものは學會である。これまで既に統一を行つた例を見ても多くは學會が中心になつて居る。即關係のある學會から委員を選び出して、長きは數年間も協議を重ね、國語學者の力をも借り、他の學科の要求をも聞き、互に意見を遠慮無く述べて、譲るべきを譲つて、しかる後に決定して居る。天文の場合では日本天文學會と東亞天文協會とが其責任と努力を分つべきであると思はれる。

多くの方々が此問題に就いて沈黙して居られる様であるが、遠慮無しにどしどし意見を發表されむ事を望む次第である。考へようによつては學術用語に就て意見を述べるのは非常に六ヶ敷い事である。吾々の場合では、第一天

文學に一通り通じて居らねばならないし、英、獨、佛、更にラテン、ギリシャ等の外國語を心得て居らねばならず、日本語及それと密接の關係ある漢文を深く理解し、しかも現在の社會、更に將來の社會、言語等に考を及ぼさねばならぬとすると、誰もつい億劫になつて了ふのである。併し以上の何れにも通ずる人は殆んどあり得ないから、各人が得意とする所を持寄つて、出来るだけ澤山の人々の意見を集めて完全に近いものを作り度と思ふのである。少數の人々で此様な仕事をやると、思違ひがあつたり、個人の好みが強くと表れたりして面白くない。

筆者の専攻とする植物學の方面でも用語統一の要求が盛になり、筆者は文字に關する事が好きな所から、學術用語に就て少し材料を集めたので、その中から用語統一に關する一般的な方針、原則等に就て次に述べて見度い。

學術用語に就て論ずる場合には

- (一) 將來學術の進歩と共に起るべき新術語の出現や、術語の内容の變化に對して如何に處置するか、
- (二) 現在の用語を如何に修正、統一すべきか、

に分けて考へ度い。

(一) の將來の用語に對しては かなり嚴重な要求をつけて其時代及將來に最も適するものを選定せねばならない。即漢文の束縛から相當に解放され、一方歐米の言語に影響された新時代の日本語に調和する様考へねばならない。多くの國語學者が過去の語の研究から一步進んで、將來の國語に就て積極的に理學者を指導したら、日本人に向かない外國語や不適當な譯語使用の不愉快から大いに救はれる事であらう。

(二) 現在既に存する用語の修正統一に當つては、あまり理想に走つて嚴重な要求をするのはよくない。著しい誤で無い限り、又甚しく不合理で無い限り一應尊重すべきである。用語に理解を有する専門家は今日協定して昨日からでも改めるであらうが、一般に對して此様な事は望めない。結局混亂を生ずるばかりである。

次に諸學會が採用して居る用語整理に關する一般方針を 箇條書にして見ると、

(一) 平易簡明で理解し易く、特に目に訴へずとも耳で聞いただけで理解出来るもの、又あまり長たらしく無く、日常口で言ふのに丁度よい位な簡潔な事。

(二) 傳統を重んじ、普通に用ひられる慣用語は甚しく不合理でない限り尊重し、殊更に新しく用語を作らぬ事。

(三) 國語を尊重する事、但し外國語で普通の慣用語若しくは國際的用語となつて居るものは之を用ひ、強ひて新譯語を作らぬ事。

(四) 漢文を常識的にでなく深く研究し、漢字を正しく用ふると同時に、其日本式の使用法をよく研究する事。

(五) 漢字を制限し、なるべく常用漢字の範囲内とする事。

(六) 他の既に統一された用語集等を参照し、可能な範囲内で之と歩調を合す事。

(七) 統一の極めて困難と思はれるものは強ひて一ツに統一せず、二三を存し永年の間の淘汰に任す事。

(八) 用語の歴史的變遷を研究する事、即如何なる語が何故に死語となつたか、何故に永い生命を有するかを明にする事。此點より見て單なる好み、思ひ付き等から從來の用語を變更したり、又新用語を作り、試みとして使用する如き不謹慎を避け、過去より將來を推して慎重なる判斷をなす事。

以上で用語整理に關する一般方針は一先終りとして、次に天文學用語に就て筆者の意見を述べて見よう。天文學用語に就ては山本會長が數回に亘つて本誌々上に述べられ、吾々を啓發する所多大であり、讃成の點も澤山あるが紙數の都合上此處には一ツ一ツは述べ得ない。併し、中には筆者として別の意見を持つて居るものもあるので、此處に書き列べて見る。

變星を變光星の代りに用ふるのは改良で無くて改惡である。これまで極めてよく統一されて居るのに強ひて混亂を起さすのはよくないし、Variable Starの直譯では星の形が變るのか、位置が變るのか始めての人には分らないし、變成、編成の語と發音上同音でまぎらはしい。其點からして「變光星」の方が遙に勝れて居るし、「變光する」「變光型」「變光範圍」等の語と關聯して考へても現在のまゝの方がよい。

支那の天文學名詞に變星を採用しては居るが、一致させねば間違ひを起す

と言ふ場合ではないから心配は無い。支那が天文學名詞を作つたのは見上げた事で、吾々が同文字の國として之と歩調を合すのは結構な事ではあるが、同じ文字でも日本には日本式の使ひ方があるのであるから、あまり支那式にこだわる必要は無い。又天文學名詞が如何なる程度にまで支那で勵行されるかも疑問であるし、眞に支那に同文字の國との間の用語統一に對して誠意があつたなら、其編輯に當つて日本の参加を求め、少くとも其「日名」の欄に就ては東西の天文家の意見を徴すべきである。それもしないし、出来上つても送つても來ない。後になつて吾々が手に入れて見ると「日名」欄には日本人の誰もが用ひぬ様な誤つた語が相當ある。全く支那式のやり方で不愉快である。

Microscopium も現在のまゝ顯微鏡で好いと思ふ。始めから「むしめがね」と譯したのなら別として、今更變へる程の事は無い。「顯微鏡」と言ふ様な發音の極めて明瞭な語は、耳で聞いても、他と混亂を來す事も絶対にないから、強ひて大和言葉「むしめがね」を引出して慣用語を廢するには及ぶまい。猶現在では「むしめがね」と言へば一ツの簡単な擴大鏡を意味し、Hand-glass, Lupe 等が洋語として用ひられて居り、之に反して鏡基の付いた高倍率の所謂顯微鏡に對して Microscope が用ひられて居る有様である。

Crux も從來通り「十字」でよい、今更訂正する必要は少しも無い。日本人は直感するまゝに十字と譯し之を用ひて居るのは正しい事である。歐米人は其宗教的感激から十字架と考へるのは當然であり、日本人の中の極く少數である基督教信者はそれに倣ふのも御隨意であるが、今更從來の名を訂正してまで十字架として仰がされるのは率直に言へば不愉快である。譯語を作る場合には原語の歴史に忠實なのはもとより必要であるが、譯語を新しく國語として使用するのが如何なる人々であるかを、それ以上考慮する必要がある。

セフニ王、ペレニスの髪、獵夫オリオン、神馬ペガサも相當理由あつての訂正であらうが、日常星座の話をするのに、こんな長たらしい名を呼んでは居られまい。「かみのけ」「オリオン」とかの方が遙によい。

以上は總會で筆者の平生氣の付いた所に、併せて、會員諸君が言はんとして遠慮して居られた所を代つて述べたものである。總會記事の追加の意味で此處に大要を載せる事にした。(昭和九年十二月)